日本生態学会関東地区会会報

第 72 号

目　次

特集１：日本生態学会関東地区会公開シンポジウム
「若手で語ろう！生態学　第 4 回「はじまりの生態学」」
野口奨悟・上野尚久・永濱藍・原直誉・夫婦石千尋・富本創・大崎壮巳・高屋浩介・植村洋亮 …… 2

特集２：日本生態学会関東地区会公開シンポジウム
「生態経済学の挑戦―ハーマン・デイリーを超えて」
安田仁奈・寺田佐恵子・宮下直 …… 5

2023 年度における地区会活動記録 …… 7
2023 年度会計報告 …… 10

日本生態学会関東地区会発行
2024 年 12 月 25 日

日本生態学会関東地区会公開シンポジウム
「若手で語ろう！生態学　第４回「はじまりの生態学」」

企画者：野口奨悟[1]・上野尚久[2]・永濱藍[3]・原直誉[4]・夫婦石千尋[1]・富本創[1]・大崎壮巳[5]・高屋浩介[4]・植村洋亮[6]

[1]九州大学、[2]千葉大学、[3]国立科学博物館、[4]京都大学、[5]広島大学、[6]北海道大学

日時：2023 年 5 月 21 日（日）13:00-18:00
会場：オンライン（zoom）

概要

【開催趣旨】どうすれば研究テーマが見つかるのか。これは、研究をはじめたばかりの学部生や大学院生、若手研究者の多くが最初に抱える大きな疑問であり、新しい研究テーマを見つけたい気鋭の研究者にとっても同様であろう。しかし、この疑問に模範解答は存在せず、“研究のはじまり“は人それぞれである。例えば、ある生き物への愛や探求心がきっかけで研究がはじまる人もいれば、「生物間相互作用」や「生物多様性」といった現象や概念への興味から研究がはじまる人もいるだろう。今回のシンポジウムの第１部では、幅広い分野の若手研究者をお招きし、ご自身の研究内容を紹介していただくとともに、その研究のルーツについて語っていただく。講演後に実施するパネルディスカッションでは、「どうすれば研究テーマが見つかるのか」という疑問について講演者を中心に、聴衆も交えて議論を行う。パネルディスカッション後の第２部では、参加者を小グループに分け、参加者間で研究紹介やそれに関連する質疑応答を行うことで、若手研究者間の交流の機会を設ける。本シンポジウムは、「気持ちが若手」であれば実年齢は問わず、どなたにでも参加していただきたい。「若手で語ろう！生態学」シリーズ第４弾となる本企画が、さまざまな立場で活躍する研究者間の交流および研究テーマ創出のきっかけを与える機会となり、ひいては生態学分野の今後の発展に繋がることを期待する。

講演一覧

企画趣旨説明　野口奨悟（九州大学）
第1部演題一覧：
野口奨悟（九州大学一貫制博士課程2年）　「Giant Killing～大型な獲物をいか

にして捕らえるか〜」
大寺真奈（山形大学博士前期課程2年）　「火山性温泉環境における地表性節足動物群集の多様性」
四ノ宮千遥（京都大学修士課程2年）　「超大型多毛類オニイソメの分類・生態—多毛類学の『今』を考える」
開澤菜月（帯広畜産大学博士後期課程1年）　「北の大地の多足類」
京極大助（兵庫県立人と自然の博物館研究員）　「ミネルヴァのフクロウはいつ飛び立つのか」
藤岡春菜（岡山大学環境生命科学学域助教）　「巣の門番は誰！？働きアリの勤務スケジュール」
中濱直之（兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師）　「標本が語る生物多様性の危機と保全」
パネルディスカッション　進行：永濱藍（国立科学博物館）、野口奨悟（九州大学）、コメンテーター：上野尚久（千葉大学）、植村洋亮（北海道大学）
第2部ショートトーク：進行：原直誉（京都大学）、夫婦石千尋（九州大学）
交流会

当日の様子とその後

本シンポジウムでは、102名に参加登録をしていただき、講演者・企画者を含めて79名にご参加いただいた。前回から30名以上も参加者が増えたことは、大変うれしい限りである。今回のシンポジウムでは、「どうやって研究テーマを見つけるのか」という、研究分野を絞らない広いテーマを設定したことにより、高校生や専門学生、社会人など様々な立場の方々にご参加いただくことができた。第1部の招待講演では、大学院生から助教までの若手研究者の方々に大変興味深い発表をしていただいた。講演者の方々には、自身の研究内容の発表に加えて、自身の研究を始めるきっかけとなった「研究のはじまり」をお話していただいた。若手研究者がどのようにして研究を始めたのかという話は、普段の研究発表の場では中々聞くことができないため、研究テーマの創出に悩む人にとって大変貴重な機会であったことと思われる。第２部のショートトークでは、高校生や学部生、大学院生、ポスドク、社会人など様々なキャリアをもつ39名の参加者に集まっていただき、相互の交流を図った。今回は、事前に配布した質問事項にもとづいて、各参加者に研究テーマを考えるうえでの悩み

やアドバイスについてスライドを用意していただいた。学年や立場の垣根を超えて、研究テーマに関して白熱した議論が行われ、参加者にとって非常に有意義な時間となったと思われる。

企画終了後に参加者に対して、アンケートを実施したところ（回答率：約50%）、シンポジウム全体を通して満足度が非常に高く、「同志同士が刺激し合っているのが胸アツだった」、「沢山の人と話が出来たことでモチベーションアップに繋がった」、「同世代の研究熱心な方々と交流できて良かった」などのコメントを頂いた。その一方で、「もっとたくさん学部生が参加してくれればよかった」、「今回の参加者に40歳以上の研究者が自分しかおらず、恥ずかしかった」、「研究内容と将来のアドバイスに向けての話を1部と２部で分けてもよかったのではないか」などの、参加者層の幅やシンポジウムの構成に関するご指摘も頂いた。さらに、「今後は各学界の若手の会と連携して分野を絞ったイベントを実施してもいいかもしれない」というご提案も頂いた。今後は、これらの点を踏まえて、学部生や中堅の研究者の増加やシンポジウムの構成の改善に努めるとともに、他の学会とのコラボレーションも視野に入れたい。また、今後も参加したいかというアンケートに関しては、「分野によっては参加したいと思う」という回答が約65%、「分野によらず参加したいと思う」という回答が約30%を占めていた。このことから、シンポジウムの企画テーマ次第で参加者の人数が左右されることが予想される。したがって、次回以降も多くの方々に参加いただけるように、運営メンバーで洗練された企画の考案に努めていきたい。

全体としては、満足度の高い結果となっており、本企画は非常に有意義なイベントを実施することができた。大変嬉しいことに、本シンポジウム参加者の中から、企画者として携わりたいと名乗りをあげてくださった方が数名いた。新たに企画者として加わるメンバーとともに、「若手で語ろう！生態学」シリーズをより一層盛り上がるイベントにしていきたい。

日本生態学会関東地区会公開シンポジウム
「生態経済学の挑戦―ハーマン・デイリーを超えて」

企画者：安田仁奈[1]・寺田佐恵子[2]・宮下直[1]
[1]東京大学、[2]玉川大学

日時：2023 年 10 月 21 日（土）14：00～17：30
会場：東京大学農学部弥生講堂アネックスおよびオンライン

講演内容

生態学と思想史の出会いから持続可能性の核心に迫る
14:00-14:10 宮下 直（東京大）趣旨説明
14:10-14:40 大森 正之（明治大）「生態経済学と H・デイリーの持続可能性」
14:40-15:10 福永 真弓（東京大）「飽和する世界のエコロジー：価値の政治と環境正義」
15:10-15:30 寺田 佐恵子（玉川大）「 野生生物の持続可能な利用：取引規制の効果と課題」
15:40-16:00 安田 仁奈（東京大）「 浅めの深海のサンゴ群集の保全を考える」
16:00-16:30 木村 純平（パタゴニア日本支社）「リジェネラティブ・オーガニック（農業）の挑戦」
16:30-17:00 長谷川 健司（東京外国語大）「サイボーグ・エコロジー：システム生態学と発展の審問」
17:00-17:30 総合討論 モデレーター：中山 智香子（東京外国語大）

参加人数

オンライン 83 名、オンサイト 28 名　計 111 名

シンポジウム報告

本講演では、まず、本シンポジウムの趣旨として、持続可能な開発は本当に開発なのか、という疑問から実は開発ではなく、発展がより意味合いとして正しいものであり、人間社会の目指すべき場所は量的な開発ではなく、質的な発展であること、さらにその考え方を裏打ちするデイリーについて紹介があった。明治大学大森正之博士から生態経済学とデイリ―の持続可能性について歴史的経緯を含めた概要の説明と紹介があり、デイリーの思想が、レーゲンに由来する熱力学に

よる経済の制約は脱炭素社会の水深には有効なものの、生物多様性の保全の面からは理論的な批判の根拠とならない可能性について指摘された。その次に環境倫理学の観点から東京大学の福永真弓博士が地球システムの枠内におさまる定常経済の重要性とともに、環境正義とは何か、誰がどのように決めるのかに関する課題や問いを投げかけた。さらに前半の最後の演題として、CITES の国際交渉も担当している玉川大学の寺田佐恵子博士から野生生物に対する多様な価値観の尊重と保全の食い違いや難しさをアフリカにおける象牙の具体的な例をあげて現場の課題として紹介した。後半は、東京大学の安田仁奈が人間と繋がりの深い生態系と人はみることも触ることもほとんどできないが、人間影響を受けながら生息する浅めの深場のせ異体系について紹介し、人間にとっての貨幣的価値から生態系を保全することの危うさと課題を問題提起した。次にパタゴニア日本支社環境社会部の木村順平氏からパタゴニアの取り組んでいるリジェネラティブ・オーガニック農業の挑戦について紹介があり、企業が地球、人間、動物の健康の安全な状態を目指すことと人間の存続に切っても切れない農業を持続可能にすること、そこに企業が主体的に参画することの意義が説明された。最後の演題としては、サイボーグエコロジーとして東京外国語大学総合国際学研究科の長谷川健司氏から発表があった。多くの生態学者の理解である元の状態に戻れるかどうかのレジリエンスではなく、Holling の考えていたレジームシフトも含めた変化・発展のレジエンスについて説明された。パネルディスカッションではモデレーターの東京外語大学の中山智香子博士から講演全体のサマリーが紹介されたのち、いくつかの質疑に対するパネリストからの返答で、異なる価値を背景する保全の難しさや、既存の枠組みで保全できないものを愛で保全できるのかなどに関して議論が盛り上がった。全体として超越境的講演にも関わらず、生態学以外の専門家も含めて 111 名に参加いただき、生態学の現場と思想史および環境倫理の接点が見いだせて今後の発展が期待された。

2023 年度における地区会活動記録

（１）第 44 回関東地区生態学関係修士論文発表会
毎年恒例の修士論文発表会を下記のとおり開催した。

日時：2024 年 2 月 18 日（日）
会場：東京大学柏キャンパス・大気海洋研究所講堂、オンライン（zoom）

実行委員：竹内宏太（東京大学），前田達彦（東京大学），平山楽（神戸大学），田辺良平（東海大学），平野日向（東京農工大学），河野恵美（東京都立大学）
後援：日本生態学会関東地区会

【口頭発表演題】
林部真奈（東京都立大学）種子中の化学防御物質に依存するアカネズミとヒメネズミの餌選択
秋元洋希（早稲田大学）ヘビの「呪い」:匂いを介した新規間接防御システムの解明
松本凌（東京海洋大学）海洋酸性化が多板綱群集に与える影響とそれを介した間接効果
青田幸大（東京農業大学）鯨類の睡眠タイプは体サイズと環境温度に依存する
戸田達也（東京大学）ダンゴイカ類の繁殖生態～繁殖形質の季節変化と交接行動～
高井万葉（東京大学大学院）Drivers of river migration and growth in Japanese seabass（スズキに河川回遊をもたらす駆動力と成長に関する研究）
竹中浩貴（東京大学大学院）耳石 Sr 安定同位体比を用いた筑後川におけるエツの母川判別
飛詰峻（筑波大学）茨城県つくバ市の茅場におけるススキの空間分布とその制御要因—茅資材として利用されるススキの現存量と質に着目して—
宮岡伶安（横浜国立大学）侵食前線が規定する植生構造と進化的背景-房総丘陵 63 木本種の系統シグナル解析より
中村奈輔（新潟大学）オオバコモザイクウイルス（PlAMV）野草分離株の宿主適応に関する研究

仲 美凪（横浜国立大学、東京大学） 高緯度北極圏 極オアシス 3 万年の一次遷移過程における 土壌真菌群集の動態解明

Duangmany Phongsa,（Yokohama National University） The Role of Chytrids on Decomposition of Large Algae （*Staurastrum dorsidentiferum* and *Micrasterias hardyi*） in Lake Biwa

田原将初（横浜国立大学）相模湾における植物プランクトン及ビ菌類の関係解明

【ポスター発表演題】

CHEN ZIYAN（横浜国立大学）里山林床における異なる下草刈りレジームが駆動する生物多様性と分解の関連性

藤本大翔（茨城大学大学院）コアシナがバチにおける早期羽化雄のコロニー上での行動

宮崎明星（茨城大学大学院）同所的に生息するフタオビドロバチ属 2 種の営巣生態の比較

青田雄太郎（東京大学大学）自然体験の「量」vs「質」-生物多様性保全行動への影響

安樂健太（東京大学）水文変動がアマゴ（*Oncorhynchus masou ishikawae*）の産卵時の掘り行動に与える影響

芹澤岳士（東海大学）ヒメイカにおける個性が与える適応度への影響

福田智也（茨城大学大学院）外来蝶（アカボシゴマダラ）と在来蝶 2 種の個体数変動と樹高選好性の比較

秋山礼（東大院）日本列島におけるユビナがコウモリの集団遺伝構□の解明及ビ移動 特性の推定

朝鍋遥（東大院）汽水域にも進出したナミアメンボ（カメムシ目・アメンボ科）の系統地理

須田崚（東京大学）集団ゲノミクスから探るハクサンハタザオの日本列島における気候適応の進化史

市村瑠美（東京農業大学）コウがイビル属 *Bipalium* の採餌生態-在来種と外来種が混在する捕食・被食関係-

太田千晴（東京大学）土壌環境中におけるミヤコグサ共生根粒菌の分布とその機能

砂川勇太（東京大学）微小なランの送粉研究

真壁凜花（茨城大学大学院）種構成が異なる植物群落における寄生植物ネナシカズラの宿主選択性
髙野菜桜子（茨城大学大学院）大葉シダ植物の老化する葉からの窒素回収
高階眞丈（横浜国立大学）青森県八甲田山における彩雪現象：緑雪や赤雪の色の違いは何の違い?

【招待講演者】
永濱藍（国立科学博物館）東・東南アジアにおける開花フェノロジーの多様性

（２）2023 年 4 月～2024 年 3 月までの地区会活動リスト
1）公開シンポジウムを 2 件開催した。詳細は、本号 2 ページから 6 ページまでの記事を参照してください。
2）地区委員会・地区総会：2023 年 3 月 3 日（金）オンライン（zoom）にて実施した。総会では、2023 年事業計画、予算案を審議し、承認された。宇野会長より、繰越金の使用用途について案（個人会員へのジャーナル（Ecol. Res.）の OA（オープンアクセス）費用の補助）が挙がったことが説明された。
3）第 44 回関東地区生態学関係修士論文発表会：2024 年 2 月 18 日（日）ハイブリッド開催にて実施した。詳細は上記（１）の通り。

2023 年度会計報告

2023 年度決算（自 2023 年 1 月 1 日　至 2023 年 12 月 31 日）

種別	項　目	計	備　考
収入	地区会費	¥0	
	地区還元金	¥460,867	
	その他	¥0	
	前年度繰越金	￥3,044,573	
	計	￥3,505,440	
支出	旅費・交通費	￥0	
	会議費・人件費	￥0	
	地区大会・講演会		
	会場費	￥66,500	
	アルバイト代	￥21,600	会場アルバイト
	講師料	￥30,724	講師旅費
	印刷費	￥0	
	修士論文発表会	￥58,667	
	その他	￥1,650	
	小計	￥179,141	
	会誌発行		
	印刷費	￥0	PDF 自作/web 掲載
	制作費	￥0	PDF 自作/web 掲載
	小計	￥0	
	事務費		
	雑費	￥0	
	銀行手数料	￥990	
	小計	￥990	
	2024 年度に繰越	￥3,325,309	
	計	￥3,505,440	

日本生態学会関東地区会報　第 72 号

発行日　　2024 年 12 月 25 日

発行者　　〒183-8509　東京都府中市幸町 3-5-8

国立大学法人　東京農工大学

大学院農学研究院　内

日本生態学会関東地区会事務局